
うしろのしょうめんだあれ

神狩夜アイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うしろのしょうめんだあれ

【Nコード】

N4062J

【作者名】

神狩夜アイ

【あらすじ】

お母さん お母さん あんな キツネがな めっちゃおってん
とおりゃんせって歌ってな めっちゃ並んどってん あれなんでな
ん？

かごめ かごめ
かごの なかの とりは
いつ いつ でやる
よあけの ばんに
つると かめが すべった
うしろの しょうめん だあれ

私はたった一度だけ、その何気ない普遍的な日常の遊戯の中で、目を開き後ろの人を確認するのが怖かったことがある。これまで何度も繰り返し遊んできた「かごめかごめ」の別称が「子捕り」だということ、この前日に母から聞かされていたからだ。

「赤い靴の女の子の歌があるやる？ 異人さんに連れてかれたっていうのは、外国にさらっていったちゅうことやねん。インターネットが普及した個人情報暴露社会もけつたいなもんやけど、セキユリテイゼロの時代の臓器売買目的の拉致とかも怖いもんやな」

後半の一文は、当時七歳の少女だった私には到底理解し難いものだった。が、その時の母の無表情と、私を捉えていないうろついた視線だけやたらと覚えていて、何かただならぬ話題だということだけは分かっていた。母が脇でかけていたCDプレイヤーから流れる、サザンオールスターズの「愛の言葉」が余計に不気味さを煽り、私は部屋を颯爽と飛び出したのだった。

とおりゃんせ。花一匁。かごめかごめ。誰がこまどり殺したの。私には理解できなかった。どうして、私の愛してきた日常のなかに、洗脳めいた言葉が埋め込まれているのか。頭の中で、綺麗なお着物を着た女の子が、こっちへおいでと手を鳴らしている。鬼さんこちら、手のなるほうへ。私は甲高い声で慟哭し、輪の中から飛び出し

た。呆然とする他の友達を気にすることなく、放課後の校庭から出て行って、家までわき目もふらず走った。母の胸に飛び込み、夕方になるまで泣き続けた。お母さん、なんで鶴と亀が滑ったん？ 籠の中の鳥って一体何のことなん？ 母は戸惑った様子で返事を返さず、ただ泣く私の頭を優しく撫でてくれていた。

誰も知らないのだろう。童謡に隠された真実など。誰ひとりとして決して、自分の背後に立つ人間の正体など分からないし、そして分からないまま、籠の中の鳥としてすべてが終わってしまう。目を閉じてしまえば、殺された鶴と亀の姿が瞼の裏にありありと浮かぶ。

勝って 嬉しい 花一刃
負けて 悔しい 花一刃
タンス 長持ち どの子が 欲しい？
どの子じゃ 分かん

あの子が 欲しい あの子じゃ 分かん
この子が 欲しい この子じゃ 分かん
相談 しましょ そうしましょ

子捕り。何故せめて小鳥だと説明してくれなかったのだろう。赤い靴の女の子の姿は、しばらく脳裏を離れず、幼い私の悪夢を否認がなしに占領する。毎日がお葬式。くだらない昔話だと分かっているけれど、現実に突然入り込んだ迷妄の世界というものは、時に現実より強い存在感を持って押し掛かる。

「そう難しく考えんなや、ただ鶴と亀が滑っただけの話や。他に問題はないうる。鶴はあんなに足が長いし、亀はいつペン滑ったら起き上がれへんのやから、起こったって別に不思議なことやない」
幼い私に母が語りかけた言葉は、落ち着かせるどころか、さらに焦燥の底へと突き落とす容易な引き金になった。彼女を恨んではいない。しかし、夏休みの朝のラジオ体操のために早起きさせられる私は、夜明けの光を見るたびに、思い出し、身震いするのだった。夜

明けの晩に、鶴と亀が滑るのかと。鶴亀といえば縁起物として飾りに用いられたりするものなのに、一体彼らに何が起こったのかと。

誰がこまどり殺したの
私が殺したと雀が言う
私の弓と矢で殺したの
私がこまどり殺したの

その十年後の今日。私は初めて、人を殺すことにした。

赤ん坊の父親は、以前から付き合っていた大学生の人。検査薬の陽性反応を知らせると、彼はよりによってしらばっくれた。

「お前、他の男と寝んかったんかい。俺の子供やっていう証拠でもあるんか？ 勝手に責任取らすなや」

殴る気には何故かならなかった。あんなに優しくかったのに、人は何て弱い生き物なんだろう。気がつけば彼の携帯の番号は変わり、かけても繋がらず連絡も取れなくなった。どうして、避妊なんて簡単なことに失敗したんだろう。私はまだ高校生で、バイトはしているけれど赤ん坊を育てるほどの財力はない。自分の身体の中に、もうひとつ命が宿っているという、その事実だけで私は貧血か何かを起こして倒れそうだった。命の意味。私はまだ、深くは知らなかった。だけど、あのかわいい赤ちゃん。それが私の命の中にひとつ、存在している。考えるだけで恐ろしかった。

周期に忠実だった生理が止まり、吐き気を繰り返す。普通なら「おめでたやね」と言われることなのだろうが、その時私は誰にも妊娠を告白できず、一人ぼっちで毎日の嘔吐や激痛に耐えていた。

最終月経から一ヶ月を過ぎる頃、妊娠したことを母に告げると、彼女はその場で私を抱きしめた。父親がいないことがせめてもの救いだった。私の中にいるもうひとつの命に関わるのは女の人の方がいい

い、と少しの安堵があつたからだ。それに、娘の私を生むために苦しい思いをしたわけではない父に、命を宿すことの恐怖や不安など、分かりはしれないと思っていた。相手の男には逃げられた、と告げると、母は涙ぐんだ。

「大丈夫やで、心配することは何もない。お母さんはあんたの味方やから」

味方。一度でも私という赤ん坊をお腹の中に身ごもっていた母だから言える言葉なのだろう。母の腕に抱かれながら、赤ちゃんの頃に戻つたような気持ちになっていた。母の体温が、途轍もなく優しく思え、そして今の自分は仮にも母親なんだ、と思うと涙が溢れてきた。

彼女はすぐに、私が生まれた産婦人科に連絡し、早急に墮胎手術を行うよう頼んだ。手術。聞くだけで何だか恐ろしい単語だった。手足をきつく固定され、足を開かされ、腹の奥深くに器具が入つてゆく感触。子宮に感覚はないけれど、何か、内側を人工のものが侵食する振動だけは分かる。男とのセックスよりずっと無機質で、義理や人情などありはしない。

今、私の身体の中で、ひとつの命が消えようとしている。暗闇の中で、光を求めて変貌を遂げていた人間の命が、出口を見つけれないままその命を終えてしまう。心音が、消えてゆく。身体のすべてが、未熟なまま冷たいものに踏み潰される。消えてゆく、頭、目、口、耳、手、足、胴体、心音。飛び立つ無数の紋白蝶のように霧散するおなかの子供が、脳裏で私を冷ややかな瞳で見ている。鼓膜の、鋭い裂帛の音。
私は恐怖のあまり、叫んだ。

麻酔が切れるまでの間眠っていた私の夢の中に現れたのが、花模様の赤いお着物を着たおかつぱの女の子が、唄を謡いながら手毬をつ

いている。無数の雪洞に黄色っぽい赤の灯がとまり、それらが並んで空中を漂う。手燭を持った白装束の老人が行列を成して女の子の両脇を通り過ぎていく。竜笛が鳴る。どこからか響く太鼓の音が、赤穂浪士の討ち入りの合図を思い出させる。女の子は正確な音程で唄を謡いながら、笑顔で手毬をつき続ける。

あんたがたどこさ 肥後さ 肥後どこさ 熊本さ 熊本どこさ 船場さ

カラフルな毬は力に流されるまま、地面と女の子の手を行き来する。次第に女の子の声は笑い声になり、手燭を持った白装束の姿が風のような早さで彼女の脇を通り過ぎてゆく。遠くで関所が見え、門前に構える二人の侍の間を通り抜けて消えていく。女の子は笑い続ける。手毬を空中に投げ、笑う。

「雪洞を消して、お控えせえ、お狐様の行列やで」

どこからか女性の声が聞こえる。日もとっぷり暮れた紺色の空の下、くつきりと見える丘の上で、ひたすら長い、どこまでも長い狐の行列が続く。両手を広げるほどの大きさの赤い満月を背景に、手燭や雪洞を持ち、傘を差し、お着物を着た狐が神妙な面持ちで歩き続けている。ちりりん、ちりりん、と鈴の音が、狐の足並みと合わせて鳴る。一番先頭を歩いていた、袴を着た狐が私の方を向き、その細く吊りあがった目で私を睨み、不気味に笑った。私が呆然と見つめている中、真つ暗な夜の闇に映える、蛍光灯のような光を伴った真っ白な紋白蝶が地面から無数に飛び立つ。騒擾のような物凄い羽音を立てて、まるで逆流した滝のように。狐の行列を覆い隠し、私の周りを渦を巻いて取り囲む蝶たち。空気がそれに呼応して響く。蝶の向こうで、女の子が正座をして座っている。綺麗に切りそろえられた前髪の奥で光る瞳が、どこまでも暗く、寂しかった。女の子はにっこりと笑い、私に向かって両手を差し出した。その小さな手のひらの上に乗っていたのは、小さな小さな折鶴。私は蝶の群れの中からそつと手を伸ばし、その折鶴を手にとろうとした。指先に触れた瞬間、折鶴は拒否するようにその両翼を羽ばたかせ、私の腕の周

りをくるくると回る。女の子は笑い続ける。あははは、あははは、と、軽快に。渦を巻いていた蝶の群れが飛び立ち、回り続ける折鶴はその赤色の身体を広げ、私の身体を突き抜ける。透明人間のよう。立っていることもままならない風圧に尻餅をつく、その場所から地面がガラスのように割れ、真つ暗で何も無い場所に落ちていく。共に奈落の底へ私を包み込んで落ちようとす無数の折鶴たち。女の子はそれでも笑う。割れた穴から私を覗き込んで。必死に手を伸ばす私の姿を見て、楽しんでるように。底からは植物のツルのような、粘ついた触手が私を食らおうと待ち構えている。手足に絡みつく物体。途轍もない力で、私を奥へと引きずり込もうとする。追い求めた光から遠ざけて、最も深い場所へと。髪が乱れ、顔全体を覆い隠す。気持ち悪いほど生ぬるい感触。腹が割れ、臓腑が飛び出しているような圧迫感。折鶴たちにすがりつくように、手足をばたつかせながら、私はただひたすらに、堕ちてゆく。

とおりゃんせ とおりゃんせ

ここはどここの細道じゃ 天神様の細道じゃ

ちよつと通して下しゃんせ 御用の無い者通しゃせぬ

この子の七つのお祝いに 御札を納めに参ります

行きはよいよい 帰りは怖い

怖いながらも とおりゃんせ とおりゃんせ

私は母親のはずだったのに。母親らしいことはなにもしなかった。それどころか、まだ光を見ぬ自分の子供を、未熟なまま殺した。私はしばらく学校を休み、自己嫌悪から何とかして逃れようとした。まがりなりにも殺人を犯した私が、正常でいられるはずがなかった。光に手が届かず、暗い底へ堕ちていく。もし私が、母のお腹の中で

流産や死産をしたなら、きつとあんな光景を見ていたのだろう。目が開いた胎児は、母のお腹ごしに外の光がかすかに見えるというが、私の子供は、まだ目も手足も髪の毛一本すらもないまま、光から闇へと引きずられていった。あの冷たい、無機質な器具に絡み取られて。

息子が娘か、子供を失った私は、家に引きこもり、幼い頃に読んだ絵本を再び開いた。チロヌップのきつね。優しい老夫婦に拾われたきつねの子供が、自立し、厳しい冬の寒さの中子供と共に死ぬ。雪に埋もれるように眠り、春にはその場所に花が咲いている。私は思わず、涙を流した。私も子供と一緒に死ねばよかつたのだろうか。我が子を自分の意思で葬り去った母親として、責務を果たすべきだったか。

母親になること。私は、子供を守れるほど大きな籠にはなれなかった。

きつと私は何年かあとに、子供を生む。その子が七つになる頃に、生まれてきてくれてありがとう、と心から思えるかも知れない。命というものはめぐりめぐって生まれてくる。子供が出来たら、あの時おろした子の代わりに大切にすることが出来るだろうか。

私は初めて、鶴と亀の苦悩を知った。私の中にいた小鳥は、結局外へ出ることは出来なかった。子供を失ったことで私も傷ついた。何日も自分を責め続けた。私は自分の子供と共に、自分の意志も葬り去っていた。責任も持てない私に、母親になる資格はない、と。

だけど、最後には私も大人になり、結婚し、子供を生むだろう。私は私の身体の中に宿した命の灯火を、私が消したりしない。小さな芽を摘んだりしない。私は、「かごめかごめ」の中央で目を閉じ、暗闇の中あの歌を聞く怖さを知っているから。

誰にも知って欲しくない、あの奈落の底の闇。引きずりおろされる感触。紋白蝶の怖さ。

そして多分、今夜の夢に現れ出るだろう、あのお着物の女の子に、笑いかけて共に「あんたがたどこさ」を歌うのだろう。その子の七つのお祝いに、私は笑いかける。一緒にお札を納めにいく。そのために、迷うことなく、手を差し伸べることが出来るかもしれない。私は私を許せるかもしれない。

うしろの　しょうめん　だあれ

(後書き)

弁解しますが、実話なんぞではありません(笑)。
和製ホラーは大好きです。怖いけどw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4062j/>

うしろのしょうめんだあれ

2010年10月15日21時19分発行